

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	1690200520		
法人名	社会福祉法人 伏木会		
事業所名	グループホーム如意の里		
所在地	富山県高岡市伏木本町10-8		
自己評価作成日	令和4年10月5日	評価結果市町村受理日	令和4年12月16日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人富山県社会福祉協議会		
所在地	富山県富山市安住町5番21号		
訪問調査日	令和4年11月1日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<ul style="list-style-type: none"> ・食事の準備や洗濯物をたたむ等の家事の手伝いを通して、残された力を発揮できる時間を設けている。休んでもらう時間も大切に、ゆったりした生活を送ってもらえるよう心掛けている。 ・コロナ禍の面会では、以前のように利用者と家族が直接会って触れ合うことができないが、一定の距離をとって顔を合わせ、職員が間に入っただけの会話をしてもらっている。 ・天気の良い日は外でお茶を飲む機会を作り、近くにある田んぼを見てもらったり、お祭りを見学するなど、季節を感じてもらっている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<ul style="list-style-type: none"> ・センター方式のアセスメントシート(一部)を活用し、重度化していく利用者一人ひとりの声や思いを汲み取ることに努めている。その情報を得るため、利用者との関りを大切にする中で、関係性もより深まっていることが多くの情報が詰まったアセスメント内容に表れている。 ・スタッフミーティング、アセスメント会議の他、事故対策、身体拘束、虐待防止、苦情処理、感染症防止の各委員会などを毎月行い、情報共有や学びに繋げている。今年度は「自分がその立場だったら…」と支援を自分自身に置き換え、職員は利用者寄り添い、耳を傾け丁寧な暮らしの支援に取り組んでいる。 ・毎日の生活がゆっくりと過ごせるよう、職員もゆとりを持って急かせることのない支援に配慮している。
--

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	職員の目の届きやすい場所に基本理念を掲げ、職員全員で理念を共有しながら、理念に沿ったサービスを提供できるよう、実践している。	玄関には法人理念、事業所職員カウンター内に事業所理念、運営方針、事業計画を掲示し共有されている。それらは毎年職員間で振り返り見直しを行っているが、コロナ禍が続き、職員以外は原則事業所内には入れないため、利用者や家族等には周知されていない。	職員間で検討された理念、運営方針、事業計画等が利用者及び家族等に周知される取り組みに期待したい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍の現在は以前のような地域の方との直接的な交流はほとんどない状態であるが、地域の祭りの見学はしている。また、食材については近隣のスーパーや商店を利用して用意している。	近隣自治会サロン等の活動再開状況は把握している。しかし、コロナの感染状況が高止まりなため、参加や保育所との交流は、依然として厳しい現状にある。地域の祭りは開催され、沿道から見学することができた。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議の中で、認知症の症状、対応例等を報告。グループホームのあり方について説明している。また、質問や相談があった場合は助言させてもらっている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナウイルスの感染状況により、委員の方々に集まっていたり開催する月と、資料配布での開催に替えさせていただいている月がある。意見や助言についてはカンファレンス等で職員に報告し、質の向上に努めている。	今年度はコロナ禍により、会議を対面開催と書面報告と交互に実施している。地域の自治会関係や民生委員、女性部、家族代表、地域包括支援センター、同一敷地内にある小規模多機能事業所と共同にて開催し、議事録が作成されている。	今後は、家族代表のみならず利用者や家族にもサービス内容や検討内容、会議録を報告・周知することで、透明性の高い運営の確保や質の向上に繋がるよう期待したい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議に地域包括支援センターの職員に参加していただき意見をもらっている。また、日頃から連絡を取り合うようしており、協力関係を築くことができている。	行政の役割を担う地域包括支援センター職員は、運営推進会議メンバーでもあり、情報交換を行っている。また、高岡市や富山県担当課から最新の介護保険情報や感染対策・対応等についてメール等を活用して情報を得て連携を図っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	年4回以上委員会を開催している。職員全員が身体拘束についての意識を持ち業務に就いている。 玄関については、併設事業所の利用者もいることもあり、施錠させてもらっている。	「身体拘束に関するマニュアル」に基づく支援に心掛けている。毎月のカンファレンスでも、身体及び精神的拘束について検討を行っている。毎年「虐待の芽チェックリスト(アンケート式)」を実施し、自らのケアを振り返る機会を設けている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	年4回以上委員会を開催している。身体拘束についての意識を強く持つようカンファレンスの場で話し合っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護について学ぶ機会を持っていない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約を交わす際には、書類上の説明だけでなく、生活を送る中で考えられる課題や状態の変化による対応で、家族の協力も必要になることを理解していただいた上で契約を結んでいる。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者や家族から、気軽に話をしてもらえるような関係、雰囲気作りを心掛けている。コロナ禍で面会規制もあるが、ケアプラン説明時や電話連絡時に要望を聞くようにしている。	受診の連絡や「如意の里だより」を発行し、行事の様子や利用者の表情等、家族等に暮らしが伝わるよう努めている。利用者には日々の暮らしの中で、家族等には面会や報告連絡時に要望等を聞いている。	これらの報告と併せて、運営推進会議の内容を周知することで、より運営について双方向的な情報が提供・共有され、これまで以上に活発に意見や要望が反映される取り組みに期待したい。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	年1回の予算編成時に、各部署の運営方針や処遇方針を明確にする時点で、カンファレンスを通じての意見の集約に努めている。また、職員の思い、意見を聞く場を年2回設けている。	管理者が中心となり、毎月スタッフミーティングにおいて就労環境や業務内容について検討する機会を設けている。職員からは、駐車場が狭いと課題が多く寄せられ、法人と相談し、駐車スペースを新たに拡張している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	人事考課制度に目標管理を導入し、個々の目標の達成度を年二回詳細に把握し、個人の評価や、職場環境の改善に取り組んでいる。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	各部署の目標管理の中に、不足能力の修得を位置づけ、計画的に研修に参加し、スキルアップを図っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍になってからは、同業者との交流の機会は設けていない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人と話せる時間を多くとり、話の内容だけでなく、表情の変化にも注目して気持ちを汲み取れるよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族の方が抱えている不安や要望を知り、生活を送る中での改善点や、安心に繋がる助言、相談も聞いている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人と家族の思い、生活状況を聞き入れ、身体状況や認知症状に合わせて、何を必要としていて、どう支援していくべきかを明らかにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	家事の手伝いの中で、やりがいや喜びを感じてもらえることを探し出し、役割を持った生活を送ってもらえるよう支援している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ケアプラン説明時や必要品を持参してくださった際には、利用者さんの近況をお伝えし、必要に応じて家族の協力を得る場面もある。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	知り合いである併設デイサービス利用者の方との顔合わせや、地域のドライブや散歩を行っている。家族の方とは距離をとっての面会を行っている。	コロナ禍が長く続いており、ビデオ通話の対応に加え、玄関ホールでの対面式の面会も取り入れている。また、受診外出時に自宅や馴染みの場所へ立ち寄りたり、年末には年賀状を作成して送る取り組みも行っている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	個々の性格や生活状況をもとに、利用者同士の相性を見極め、会話や協力作業を通して孤立感の解消を図っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	他の入所施設で生活することになった方に対して、家族の了解のもと、先方の職員に情報を提供している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者の表情や言動、生活の様子などから情報を集め、本人に思いを確認。センター方式を活用して職員間で共有している。	職員は利用者一人ひとりに寄り添い、関わりの中から思いや意向をカンファレンスノートに記入し、提案や検討する仕組みになっている。また、アセスメント会議で話し合い、情報を共有している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前に、本人家族、担当ケアマネジャーや主治医といった本人を取り巻く関係者からできる限りの情報を集めている。家族には生活歴や特記事項を記入できる用紙を記入してもらい、サービス提供に繋げている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	生活のペースを把握して、状態の変化や新たな発見があった際には、記録に残し申し送り時に共有している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	心身の状態を把握して、本人の思いや考え、家族や主治医の意見も取り入れ、担当者会議で話し合い、最適な支援計画になるように努めている。	入居時、家族にこれまでの暮らしの情報を記入してもらっている。センター方式を利用してケアマネジャーが中心となり、毎月アセスメント会議を開催し職員全員で話し合い、利用者の思いや意向を詳細にまとめている。入居後それらを反映した介護計画を作成し、6ヶ月毎に家族の意向や主治医の意見を確認し、介護計画を更新している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別の介護記録や排泄、食事量や入浴状況などの記録からの情報、職員の意見を活かして、介護計画の見直しを行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	コロナ禍の現在、できることには限りがあるが、利用者と家族の思いを聞き、要望に応えることができるように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	祭りの見学、食事のテイクアウトなど、コロナ禍でも地域を感じ、楽しめる行事を立案、実施している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居されてからも本人の状態を把握できている事から、かかりつけ医の継続を勧めている。職員付き添いのもと受診に行き、口頭での状態報告の他に、心身状態の記録を提示している。	利用者は入居前からのかかりつけ医で受診を継続している。コロナ禍前は家族の協力で受診を行っていたが、現在は、毎日の健康状態を記録し、職員が付き添い受診を行っている。受診結果は家族に報告している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	体調不良時や、処置が必要な時は、併設事業所の看護師に対応してもらっている。必要な意見、アドバイスをしてもらっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は地域連携室を通じて病院側へ情報を提供している。退院時に向けて必要な支援をさせてもらっている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	現在看取りケアは行っていない。チームでの看取りケアに向けた知識や技術の修得、さらに職員の気持ちの整理、心構えを含めたメンタル面でのケアができるように努めている。	契約時に看取りを行っていないことの説明を行っている。体調や身体の変化に伴い、入居の継続が困難になった場合は、本人、家族の意向を確認しながら、次の生活場所を紹介できるよう支援している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	昼夜共に、事故や急患発生時にはマニュアルに沿って対応している。定期的に救急救命士指導のもと、救急時の対応研修に参加している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の火災を想定した避難訓練を行っている。地震、水害についての自主訓練は行っていない。	日中の火災を想定した避難訓練は3事業所全体で行い、夜間の想定は2階の2事業所で行われている。事業所が所在する地域は港に面しているため地域、自治会で防災訓練を実施している。水災害地区には指定されていない。2階建のため他の災害避難訓練は行っていない。備蓄品の管理は法人で行っている。	火災以外の避難訓練について移動や動作が日常生活の中で実施できるように工夫したり、当事業所内での避難グッズや備蓄品を検討したりするなど、災害対策を整えられるよう期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	関わりを持つ中で、まず自分だったらどう感じるかと置き換え利用者の気持ちになって考えて自尊心を傷つけないように接している。	トイレの戸を開け放してされる利用者や服装の汚れや身だしなみに配慮し、言葉かけや支援を行っている。咄嗟に出る言葉がスピーチロック等に当たらないか自分に置き換えて考え、話し合ったり、その場で注意を行ったりしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日頃からコミュニケーションをとることを大切にして、気軽に思いを表現できる関係性の構築を目指している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員側のペースで過ごしてもらうのではなく、利用者主体で生活してもらえるように選択権を持てるような問いかけを心掛けている。気持ちを表現しやすくなるような雰囲気作りにも注意している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	起床時には整髪を行い、髪が長くなった時には、月2回来てもらっている地域の床屋さんに自分好みの長さに散髪してもらっている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	おかずの盛り付け、食器洗いなど、試しの段階を踏んでからできることを見つけ、順に手伝ってもらっている。他にも季節を感じてもらえるメニューを立案、出前をとって食事を楽しんでもらっている。	管理栄養士の献立を基に地元のスーパーで食材を調達し、職員が手作りで提供している。利用者に合わせた高さの配膳台を置き、家事作業や献立をボードに記入する等手伝いができるように工夫している。季節、行事に合わせたメニューや利用者に希望を聞いてテイクアウトを取り入れ、食事を楽しんでもらっている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事摂取量を毎食後に記入して、食べた量から残ってしまう物まで知り、刻んでみる、味付けの工夫、食器の変更などの試行により、必要量を食べてもらえるようにしている。水分に関しても、好みの物を提供、温度にも注意して勧めている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後に口腔ケアをしてもらえるように声を掛けている。必要な場合は介助に入り、ポリデントなどの洗浄剤を使っての除菌、清潔保持を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄表から個々のパターンを把握して、適切な排泄用品の使用、尿意の有無確認をしている。	毎日の記録を把握表に記録し、排尿、排便のパターンを把握して声掛けでトイレでの排泄、パット交換の支援をしている。毎日の乳製品の摂取や運動、服薬管理を含め便秘を予防し定期的に排泄ができるよう工夫し支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘日数により乳製品の提供、体操やリハビリ運動での活動量の増加で排便に繋がらないか実践している。主治医にも状態を報告して、必要な下剤を処方してもらい、日数に合わせて服用してもらっている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	基本的には入浴日を決めているが、利用者の希望によっては入浴日を変更している。	浴室は個浴、特殊浴槽等、利用者の身体状況に応じた浴槽を利用している。入浴は月～土の午後で利用者の身体状況に合わせて支援している。また脱衣室で音楽を流したり、入浴剤を使用したりしてリラックスし、楽しめるよう工夫している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	生活ペースに合わせて、日中の休む時間を必要とされている方には休んでもらっている。夜間の就寝時間については本人に各々に合わせた時間に休んでもらっている。細かに温度や照明の調整もしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬情報の一覧表を作り、何のために服薬しているのかを理解し、服薬することに対してのリスクについても気を付けている。毎朝セットされている薬に誤りがないか、ダブルチェックしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	家事の中での担当を持ってもらうことで、やりがいや達成感、喜びを感じてもらえるようにしている。嗜好品については、家族の方に差し入れしてもらっている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	コロナ禍ということもあり、以前のようにドライブに出掛けたり、外食に行く事は控えている。天気が良い暖かい日には外でお茶を飲むなどで気分転換を図ってもらっている。	コロナ禍により、天候の良い日は、前の通りを散歩したり、敷地内に椅子を置いて日光浴やお茶をしている。近所の方や近くの保育園児の散歩時に声掛けや挨拶を行っている。また、季節の花見や近くの山や海へドライブに出かけている。受診時の送迎時に利用者宅の前を通り寄り道することもある。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭、貴重品管理については、本人と家族の方に説明、了解を得て預らせてもらっている。使用した内訳を預かり帳に記載し、領収書と共に保管、定期的に家族の方に確認してもらっている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	利用者から家族への電話の希望があれば、家族の方の生活状況に配慮した時間に電話を繋いで話をしてもらっている。手紙や年賀状の便りが来た際には、できる限り返信などの対応をとっている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	フロアには利用者と職員が一緒に作った季節の作品を適度に飾っている。テレビ前にはソファがあり、くつろげる空間を設けている。音や光、温度も利用者に合わせて居心地の良いものになるよう心掛けている。	向かい合った居室の中央に共有スペースがあり、正面の大きな窓は明るく、外の景色が良く見える。キッチンスペース、テレビ、ソファ、テーブル3台が広いスペースにゆったり配置されている。壁面には季節を感じる作品装飾の他、地域の祭りのポスターや国宝の写真掲示があり、地域を感じる工夫をしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	利用者同士の関係性を把握し、気の合う方同士が和やかに過ごせるように食事の席や、ソファに座る際など配慮している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ベッドやテレビなどは、本人が使いやすい位置に配置させてもらっている。可能な限りは馴染みのある自宅で使用していたものを持参してもらっている。	洗面台、整理タンス(固定)、ベッド、エアコンが設置されており、整理整頓されている。利用者は共有空間で過ごすことが多く、利用者の身体状況や稼働域を考え、ベッドの配置を工夫している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレ前には看板を設置して迷わずに行けるように工夫している。食事の席の椅子には名前を貼り、自分の席が分かるようにしている。		

目標達成計画

目標達成計画は、自己評価及び外部評価結果をもとに職員一同で次のステップへ向けて取り組む目標について話し合います。
目標が一つも無かったり、逆に目標をたくさん掲げすぎて課題が焦点化できなくならないよう、事業所の現在のレベルに合わせた目標水準を考えながら、優先して取り組む具体的な計画を記入します。

【目標達成計画】					
優先順位	項目番号	現状における問題点、課題	目標	目標達成に向けた具体的な取り組み内容	目標達成に要する期間
1	1	職員間で検討された理念、運営方針、事業計画等が利用者及び、家族等に十分に周知されていない。	グループホームの基本理念、運営方針、処遇方針を家族、外部の方々にも知っていただけの環境を作る。	基本理念、年度ごとの運営方針や処遇方針について毎年家族に書面で送るなどで報告する。また、外部の方に知っていただくためにホームページに記載する。	5ヶ月
2	35	火災以外の水害や、地震に対する避難訓練が実施されていない。事業所内での避難グッズや水や食料品等の備蓄が十分に足りていない。	水害や地震を想定した訓練を計画して実施する。利用者と職員、さらには地域の方々の支援に繋がる避難グッズや水、食料品等を自事業所で管理する。	年に1回は水害・地震を想定した訓練を行う。必要に応じて、消防署員の方の意見を取り入れる。自事業所で災害に対する備蓄を管理できるように、まずは管理場所を新たに作る。	12ヶ月
3					ヶ月
4					ヶ月
5					ヶ月

注) 項目の欄については、自己評価項目のNo.を記入して下さい。項目数が足りない場合は、行を挿入してください。